

温州の廟と祭神について

二階堂 善 弘

On some temples and gods of Wenzhou

NIKAIDO Yoshihiro

In December 2014 I conducted field research in Wenzhou, focusing primarily on the temples of the local deities Hugong Dadi, Sangang Shengwang, and Yangfu Houwang, and confirming that traditional beliefs remain well preserved in Wenzhou.

キーワード：温州 (Wenzhou)、地方信仰 (local beliefs)、民間信仰 (popular religion)、
寺廟 (temples)

前 言

温州は浙江省の南方に位置する都市である。経済的な特色で知られる都市であるが、文化的には台州とともに「温台地区」と称されることが多い。以前に筆者は「寧波プロジェクト¹⁾」において、浙江省の北部について調査を行ったことがある。しかし浙江の中南部については当時時間が足りず、十分な調査ができなかった。現在は伽藍神と地域神を中心に調査を再開しており、断続的に訪れることにしている。

今回、2014年12月に温州と福州において現地調査を行った。短い滞在であったが、これまで調べた寧波や杭州とは地域の廟の性格が異なることが理解できた。たとえば、一般に民間の廟といえは関帝廟や媽祖廟が挙げられるが、温州では媽祖廟は一箇所のみであった。また全国的にみて一般的である関帝廟はほとんど存在せず、胡公大帝や三港聖王、または楊府侯王といった地域の神々を中心とした廟の方が多かった。いずれも、温州においては伝統的信仰がよく残されていることを示すものであると考える。ここでは訪れた廟を中心に、温州の廟の特色について論じたい。

1 温州の地域神

『明代温州民俗文化』によれば、温州において祭祀される主要な神々は、東甌王・忠靖王・楊府大神・広済侯・平水聖王・三港聖王であるとされる²⁾。これらのほか、筆者が実際に温州の各廟で目睹したものには、胡公大帝・五顯大帝・包大慈王・丁氏娘娘・元弼真君などがある。

いずれも温州・永嘉付近で信仰されるもの、または浙江中南部、或いは安徽・江蘇など限られた範囲で信仰されるものである。対照的に全国で祭祀される神を祀る所は少ない。媽祖廟は一箇所のみであり、また関帝を祀る所も少なかった。

こういった状況は、他ではあまり見ることがない。福建や広東もその地域固有の神は強い信仰を持っているが、それとは別に関帝廟や二郎廟も数は多い。そのように全国的な神と地域神が併存しているのが通常の姿である。温州はその意味ではかなり特殊な地域であると言えるかもしれない。

とはいえ、全国的な神も少ないとはいえ存在する。たとえば三官大帝は、廟のみならず、寺院にも置かれている。上に挙げた包大慈王は、包公のことであり、こちらも南方では普遍的に

1) 文部科学省科学研究費・特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成」、通称「寧波プロジェクト（にんぷろ）」（代表・東京大学大学院・小島毅）。

2) 蔡克驕・劉同彪『明代温州民俗文化』（知識産権出版社2011年）71～76頁。

廟が存在するものである。文昌帝君を祀る廟もそれなりに目睹した。ただ、いずれも温州の地域神に比しては弱く、併祀にとどまるものが多い。

五顯廟も多いが、五顯大帝については難しい。五顯大帝は五名の神として祭祀する場合と、華光大帝を中心として、他の五顯神を従神とする場合があるからである³⁾。これは華光大帝を独尊として扱う方が新しい形式であると考えられる。五顯廟も、温州の廟はより古い形を残すものと考えられる。

温州の民間信仰については、明の姜準の著である『岐海瑣談』が重要な記録であるとされる。姜準は字を平仲、永嘉の出身であり、明の嘉靖から萬暦ごろに活動した人物である⁴⁾。この『岐海瑣談』巻十二には、温州地区の神々について非常に詳しい記録が見られる。幾つかの地域神の由来などについては、同書にしか記載がないものも多い。

万暦年間の『温州府志』巻四祠廟志には、府城隍廟・県城隍廟・東瓯王廟・横山周公廟・張忠惠王廟・龔將軍廟・忠靖王廟・大禹王廟・関王廟・玄壇廟・三港廟・広恵廟・保徳明王廟・五霊廟・楊府廟・英顯廟・九聖廟・宣霊広平王廟・海神廟・保安侯廟・広済廟・茶場五顯廟・海壇平水廟・恵応廟・霊護廟・興畢龍王廟・晏公行祠・広恵行祠・順済行祠など、おびただしい数の廟宇が記載されている⁵⁾。このうちの楊府廟や横山周公廟など幾つかは現在でも残っており、このたびの調査で訪れることができた。

2 楊府侯王と楊府廟

楊府侯王は温州では普遍的に見られる神である。また「楊府大神」「楊府爺」とも称される。姓は楊、名は精義で、唐の頃の人とされる。十名の子があったという。『岐海瑣談』には瞿嶼山の廟を中心に次のように記す⁶⁾。

北山楊府大神廟在九都瞿嶼。廟中旁列十子、以行第稱為相公、各有配偶夫人。凡合夥經營慮相侵負、及暗昧之事無由暴白者、必詛諸神以冀昭鑒。凡遠行商販者、泛海捕魚、及嬰疾瀕危卒、病沉厠者、必禱諸神以藉庇佑。婦女死於急症、禾稼成熟而糠粃者、俱指為神所攸

3) 華光大帝と五顯神については、筆者『道教・民間信仰における元帥神の変容』（関西大学出版部2006年）180～189頁参照。

4) 姜準については、『岐海瑣談』（『温州文献叢書』上海科学院出版社2002年）1頁の「前言」、及び前掲蔡克驕・劉同彪『明代温州民俗文化』123～139頁を参照。

5) 本論では古典籍の多くについては、関西大学アジア文化研究センター所蔵の『中国基本古籍庫』データベースを利用して、画像などを確認の上引用を行っている。

6) 前掲『岐海瑣談』204～205頁。



北山楊府廟

撰。伝聞毎春夏交、往海禱養、積雨遇晴、謂神曬養之候。(略)先君曾稽神出处、梁陶貞白流寓永嘉、神及門学道、以其氣質未純、難於印証、度為鬼仙、血食人世、此其威靈睟蠻久遠而昭著也。夫北山、江北永寧山也、見有楊府洞。

瞿嶼山は現在では「楊府山」とも呼ばれているが、これはこの楊府廟があることに由来する。現在でもこの地には楊府廟が存在し、人々の祈る場となっている。楊府廟に祀られている神は楊府侯王・太保・土地公・十洞尊王・呂祖・太陰聖母などの神々である。

『明代温州民俗文化』によれば、楊府大神は漁民と海商のための守護神であるという⁷⁾。このような水神や海神は、温州一帯で数多く存在している。或いは媽祖の信仰が異様とも思えるほど微弱なのは、これらの水神の信仰が現在でも盛んであるためかもしれない。

3 平水聖王と平水観

平水聖王は「平水王」「平水大王」とも呼ばれ、浙江一帯で広く祭祀された水神である。姓は

7) 前掲蔡克驕・劉同彪『明代温州民俗文化』128頁。



平水観の外貌



平水観内部

周、名は凱であり、六朝時代の人とされる。この平水聖王については、以前に筆者は招宝七郎の関係で論じた⁸⁾。かつて同一の神であると考えた招宝七郎と平水大王は、職掌が似ているものの別個の神であると現在では判断している。

北宋期に天台山を訪れた成尋は、伽藍神のひとつとしてこの平水大王を挙げている。その平

8) 筆者「平水大王と招宝七郎」(永上正他著『近現代中国の芸能と社会－皮影戯・京劇・説唱－』好文出版2013年) 113～123頁。

水大王という呼称自体、水神としてありふれたものであり、同じ名称で別個の神である場合は多い。

現在の温州市政府の付近、二つの川が交差するところに、水上に位置するかのように廟が建てられている。「平水観」別名「水心道観」である。ここは平水聖王周凱を祭祀する廟である。平水聖王のほか、「三港聖王」「楊府侯王」が脇に祀られ、また別に観音大士と三官大帝を祭祀する。この地域の水神を集めたものであると考えられる。

平水聖王周凱については、以前に筆者もふれたように朱海浜氏に詳しい研究がある。周凱については宋濂の書とされる『温州横山仁濟廟碑』に事績を載せる⁹⁾。

若横山廟神之事、其明效可觀已、神諱凱、字公武、姓周氏。世居臨海郡之横陽、生而雄偉、身長八尺余、髮垂至地、善擊劍、能左右射、博文而強記。家雖貧、躬耕以養父母。(略)時臨海属邑、曰永寧、曰安固、曰横陽、地皆瀕海、海水沸騰、蛇龍雜居之、民懼其毒、神還自乃白于邑長、隨其地形、鑿壅塞而疏之、遂使三江東注于海、水性既順、其土作乂。永康中三江逆流、颶風挟怒潮為孽。邑將陸沉、民咸懼為魚、神奮然曰、吾將以身平之。即援弓發矢、大呼衝潮而入、水忽裂開。電光中見神乘白龍東去、但聞海門有声如雷、而神莫知所在矣。俄而水勢平、江禍乃絕。邑長思其功、号其里曰平水、且建祠尸祝之。

平水聖王の廟は温州付近でも他に幾つか存在し、この地域での一般的な祭祀であることがうかがえる。

この平水観に他に併祀されるものとして、三港聖王がある。これも水神として知られる神である。三港聖王はまた「三港大聖」とも称される。唐の頃の人で、姓は陳氏。胡公殿などにも併祀されているのを見る。

4 山王と元弼道観

山王は、有名な王子晋のことであり、また元弼真君とも呼ばれる。天台山国清寺の伽藍神であり、その影響は日本にまで及んでいる¹⁰⁾。元弼真君は寺院のほか、道観などに祭祀されること

9) 朱海浜『祭祀政策与民間信仰変遷－近世浙江民間信仰研究』（復旦大学出版社2008年）166～167頁、また宋濂の文章は『宋学士文集』卷二十二に所収、関西大学アジア文化研究センター所蔵の『中国基本古籍庫』データベースより引用。

10) 伽藍神としての王子晋については、筆者『アジアの民間信仰と文化交渉』（関西大学出版部2012年）64～67頁参照。



元弼道観の王子晋

が多いが、単独での廟は少ない。ただ温州地区には幾つか主祀とする廟が存在する。

温州の繁華街に「洪殿」という地区があり、ここに元弼道観という廟が存在する。ただ繁華街にあるためか、その一階・二階は商店となっており、その上層部分に廟があるため、やや位置がわかりにくい。

廟の主神は元弼真君王子晋であり、併祀されているのは、五英太保・平水聖王・三港聖王・文昌帝君である。「山王」という呼称から山の神であると考えがちであるが、ここでは廟自体が川辺に近く、平水聖王や三港聖王などの水神とともに祀られている。

5 胡公大帝と胡公殿

胡公大帝も温州では盛んに祭祀される神である。ただこの神の信仰の範囲はもっと広く、安徽・浙江・福建などに及んでいる。胡公大帝は宋代の官僚であり、姓は胡、名は則、字は子正で、仁宗や真宗に仕えた。『宋史』巻二九九にその伝がある¹¹⁾。

胡則字子正、婺州永康人、果敢有材氣。以進士起家、補許田県尉、再調惠州録事参軍。

生前に民利に努めたため、死後神として祭祀されるようになった。その後「胡公」と称されるようになり、旧暦八月九日に各地で廟会が行われる。

11) 『宋史』は関西大学アジア文化研究センター所蔵の『中国基本古籍庫』データベースより引用。



景山胡公殿

温州では二箇所の胡公廟を見ることができた。ひとつは三元宮胡公殿、もうひとつは景山胡公殿である。

三元宮胡公殿は、そもそも五顯廟と合わせてひとつの廟とされているもののようで、むしろ五顯大帝が目立つ存在であった。その他に忠靖聖王・三港聖王を併祀する。

五顯大帝は先にも少しふれた通り、五名の神として扱う場合と、華光大帝とその従神とする場合がある。温州の廟では五名の神の姿で祀るところが多かったと思われる。

忠靖聖王はまた「忠靖王」とも称される。その名は温瓊で、道教の東嶽大帝の配下、温元帥として知られる。

景山は温州の西側にある山で、周辺に護国寺など数多くの廟がある。胡公殿は、脇に祭神として土地公・呂祖・太歳があった。こちらはむしろ一般的によく見る組み合わせである。

6 包大慈王と湖心観

湖心観は包大慈王を主神として祀る廟である。別殿に観音大士と三官大帝も祀る。併祀される神としては、太陰聖母・普濟聖王・順応聖王・威靈聖王・文昌帝君がある。

包大慈王とは「包公」「包青天」として知られる包拯のことである。包拯は北宋の官僚で、後世では名裁判官として有名である。『包公案』や『三俠五義』のような通俗小説では主役となっている。民間信仰においても盛んに祭祀され、広東・福建をはじめとして数多くの廟において祀られる。

併祀される太陰聖母については不明確な部分が多い。ただ、この神は温州において「臨水夫



湖心觀

人陳靖姑」とともに祭祀される神であると考えられる。温州では臨水夫人は「陳十四娘娘」として広く祀られ、その廟宇には九天聖母・太陰聖母も祭祀されているという¹²⁾。

このうち九天聖母は、硃砂宮において丁氏娘娘・五福大帝などとともに祀られている。これらの組み合わせから、むしろ福州の系統に由来するものであると考えられる。

7 媽祖と天妃宮

温州においては異様とも思えるほど媽祖廟の数が少ない。筆者も調査できたのはひとつだけである。その廟の管理者に伺ったところ、温州ではその天妃廟が唯一の媽祖廟であるということであった。

これは他に平水聖王・楊府大神・三港聖王など、多くの水神がいまだに存続しているためであると考えられる。また上記のように福州の水神である臨水夫人の系統もかなり温州では強い。一般に中国南方においては、他の水神たちはその大半が媽祖の配下に属するか、消滅することとなってしまった。むろん、広東で媽祖と南海龍王が併存しているのが見られるなど、地域によっては水神が存している場合もある。かつて南宋から明代にかけては、媽祖と他の水神はむしろ併存している状況が普通であった。

温州の状況はそれに似ている。幾つもの水神が併存しており、媽祖はあくまでそのひとつに過ぎないとされる。これは恐らくより古い状態を残すものと考えられる。また媽祖の称号も「天

12) 前掲蔡克驕・劉同彪『明代温州民俗文化』119頁。



天妃宮

后」ではなく、明代によく見られた「天妃」である。

温州の天妃宮は、主神は媽祖であり、その他の神として、子孫娘娘・土地公・姜子牙・二郎神・三官大帝があった。子孫娘娘はともかく、姜子牙と二郎神が併神としてあるのは、やや奇異な感も覚える。或いは『封神演義』の影響であろうか。

8 温州城隍廟

温州の城隍神については、『岐海瑣談』に次のような記載がある¹³⁾。

城隍廟元在旧郡治子城内、今府治西南、為本府公廨及架閣庫。(略)永嘉县城隍廟亦在西南隅、不知何年間移在城南廟壳茅橋、万曆中重建。

また『岐海瑣談』には他にも城隍神が奇瑞を顕した記録が幾つか見られる¹⁴⁾。

今回訪れた城隍廟も西南に位置するものである。ただ、主神が府城隍神なのか県城隍神なのかは不明確であった。或いは双方を合わせたものか。祭神は、城隍神とその夫人のほか、土地公・玉皇大帝・文昌帝君・三官大帝などの神々であった。これは一般的によく見る組み合わせである。

13) 前掲『岐海瑣談』172頁。

14) 前掲蔡克驍・劉同彪『明代温州民俗文化』73～74頁。



温州城隍廟

現在の温州城隍廟は、新たに建てなおされたもののようで、建物も神像もかなり新しい様子であった。

9 温州の三官大帝

城隍廟に限らず、いずれの廟、また法厳教寺などの寺院で目睹したのは、三官大帝の像であった。城隍廟では玉皇大帝の脇に、また平水廟では観音菩薩の脇に、天妃廟では媽祖の脇に、必ずといってよいほど祀られていた。

天妃廟においてそのことを尋ねると、「温州では三官大帝は必ず廟も寺院も祀るものだ」と言われた。

福建においても、三官大帝を祭祀するところが多い。この地区での三官信仰の広がり、想像以上に大きいと考えられる。

時に想起されるのが、長崎の興福寺・崇福寺における三官大帝である。興福寺の媽祖堂においては、媽祖を中心にし、手前に順風耳・千里眼を配置する。そして右に関帝・関平・周倉、左に三官大帝を祀る。

台湾台南の大天后宮で、似たような組み合わせを見たことがある。主神は媽祖で、併神としては四海龍王、さらに臨水夫人・註生娘娘・水仙・土地公という組み合わせとなっている。媽祖の配下に水神が組み入れられている形であるが、これは台湾では一般的というわけではない。臨水夫人があることから、或いは福州系であるかもしれない。

いずれにせよ、温州と福州では、三官大帝を併祀するケースが多く、そういった流れが長崎の



城隍廟の三官大帝

三官大帝像に影響を与えている可能性はある。

結 語

『明代温州民俗文化』の指摘によれば、温州は古来より鬼神を尊び、神祠が至るところに存在する地とされている¹⁵⁾。現在の温州は都市化が進んでいるが、それでも多くの廟宇が残っている。幾つかは明代の廟と祭神がほぼそのまま残されており、驚くほど伝統が保存されているのがわかる。廟の多くは今でも道観として機能しており、地域社会と結びつき、道士が儀礼を行っているところが大半である。想像以上に伝統を残す廟があり、またそれが他地域とは異なる信仰状況を形成している。この点についてはそれが温州のみの特色であるのか、他の浙江の地域を調査し比較することによってその性格について考えてみたい。

15) 前掲蔡克驍・劉同彪『明代温州民俗文化』66～67頁。